

「真の共生社会とは何か、あらためて問う」有識者特別寄稿②

東京大学先端科学技術研究センター准教授 熊谷 晋一郎

暴力の問題を通して考える共生社会の条件について

暴力とは、共生社会を破壊しようとする振る舞いの謂いである。だとすれば、暴力が発生する状況を考えることで、共生社会実現の条件が明らかになるだろう。

2016年7月26日、津久井やまゆり園で起きた殺傷事件は、障害者を包摂する共生社会の価値を踏みにじる、究極的な暴力であった。しかし、この事件の社会的背景を考えると、時には慎重にならなくてはいけない。実に様々な要因が、今回の事件に影響を与えていることは明らかであるが、一つの事件のみから、どの要因がどれくらいの影響を与えたのかを帰納的に推測することは困難だからだ。

本稿では、いったんこの事件から離れ、より一般に、どのような状況で人は暴力の被害者や加害者になりやすいかについて調査をした先行研究を概観する。そして、これまでの知見を踏まえたうえで、この事件の背景としてどのような要因が大きな影響を与えていたかを論じることにはしたい。

①暴力の背後にある要因

先行研究を概観すると、障害をもつ人々への暴力が発生する条件は、A障害者に帰属される要因、B加害者に帰属される要因、C環境要因の3つに大別される。

まず、A障害者に帰属される要因には、「移動能力の低さ(虐待から避難しにくい)」、「言語障害(虐待の事実があったことを伝えられない)」(Tharinger et al., 1990; Verdugo et al., 1995)がある。また、発達障害などの見えにくい障害は、見えやすい障害よりも虐待を受けやすいという報告もある(Benedict et al., 1990; Verdugo et al., 1995)。見えにくい障害は医療者によって診断されにくく、養育者に必要な情報やサポートを提供するタイミングが遅れやすいだけでなく(Martin, 1982; Vig and Kaminer, 2002)、身体的兆候がないため、わざと反抗していると周囲に誤解されやすい(Martin, 1982)。

次に、B加害者に帰属される要因として、家族や支援者など、障害者に対するケア責任を集散的に課せられている者が加害者になりやすいという点は重要である(Chamberlain et al., 1984)。特に養育者や支援者が、ストレス、経済的困窮、パートナーとの不和、職場でのストレス、疲労、孤立を経験していると、虐待のリスクが上昇する(Fisher et al., 2008)。家族内のみでケアを引き受けるのではなく、ケアの社会化を実現することの重要性が示唆される。加害者も、過度なケア負担を分散できる依存先を社会から調達できず、社会的に孤立している様子が見て取れる。

最後にC環境要因であるが、地域コミュニティの外部にある特殊な専門機関に囲い込まれた支援環境では、虐待のリスクが高まり、発見もされにくくなる(Hibbard and Desch, 2007; Murphy et al., 2007)。また、利用者とサービス提供者との間に、権力とコントロールの不均衡がある施設や、利用者を人間的に扱わない文化を持つ施設、地域との交流の少ない施設、虐待の報告とモニタリングが手続き化されていない施設では、暴力が発生しやすい(Sobsey, 1994; Steinberg & Hylton, 1998)。

②相模原事件の背景にどのような要因が影響を及ぼしていたか

前項で詳しく見たとおり、被害からアプローチしても、加害からアプローチしても、地

域コミュニティから排除され、社会的に孤立し、依存先（生きていくのに必要な、頼れる物的・人的資源）が一部のモノや人に集中しているとき、人は、暴力に巻き込まれやすくなるといえる。

人は誰でも、生まれて間もない時期は、依存先が親・養育者に集中している。しかし健常者の多くは、成長するにつれて周囲の人々や様々な道具などに依存先を分散させていき、やがて、親・養育者が亡くなっても生きていけるようになる。一方、移動やコミュニケーションの面で重度な障害者の場合は、こうした依存先の分散過程がうまく進行しない。なぜなら、社会の物的・人的・制度的・文化的なデザインは、健常者向けに出来上がっており、障害者がうまく依存できないからである。その結果、成人してもなお親・養育者に依存先が集中し、親亡き後は、地域コミュニティから隔離された施設に依存先を移行させるほかない現状がある。

依存先が一处に集中すると、その依存先から支配されやすくなる。例えば、介助者が一人しかいなければ、その介助者に暴力を振るわれても、逃げることができない。また、意思表示を受け止めてもらえる可能性も低くなる。一方、依存されている側の介助者も、過酷なケア負担を背負いやすくなるため、二次的に地域社会や労働市場への依存先が失われる。こうして、暴力のリスクは高まっていく。労働集約的な障害者施設は、障害者の人数が介助者の人数を上回る傾向があり、そうした構造が暴力を引き寄せる。

一方、事件が起きる前の約半年間にわたる容疑者の言動は、明らかに暴力発生を予測させるものだった。しかし、彼が危険な言動を繰り返せば繰り返すほど、友人や、施設関係者は彼から距離を置くようになり、社会的な孤立は深まっていったように見える。その孤立は、おそらく措置入院によってピークを迎えたであろう。依存症の自助グループには、「危ない仲間ほど、一人ぼっちにさせない」という合言葉があるという。実際、先行研究は、ハイリスクグループに対し、刑務所や精神病院ではなく、地域の只中で優先的な支援をすることを推奨している（Andrews & Bonta, 2006）。そしてサポートの内容は、本人の変化を期待する評価・介入だけでなく、彼がおかれた社会環境への評価・介入を合わせて行うものでなくてはならない（平井, 2015）。

③同じような事件が二度と起きないようにするために

では、こうした事件が二度と起こらないように、私たちができる具体的な取り組みはどのようなものだろうか。以下、筆者自身の取り組みを紹介しつつ、いくつかの具体的提案を箇条書きで述べていく。

1) 介助者の分散

とくに移動やコミュニケーションに困難のある重度障害者は、介助者を冗長に分散させることが、暴力を逃れるために不可欠である。この分散を可能にするのは、密室的な家族や労働集約的な大規模施設ではなく、小規模施設、または、重度訪問介護などの制度を活用した一人暮らしであろう。ただし、脱施設と地域移行だけで分散が十分確保されるとは限らない。介助者を派遣する事業所が一处しかないなど、資源が乏しい地域では、依存先が特定の事業所に集中し、管理的になる場合もある。地域ケア資源に対して国政による十分な財政支援が行われなければならない。

2) 介助者の当事者研究

暴力は、それを責めたり反省させれば予防できるものではなく、むしろ水面下に潜ることも少なくない。筆者は事件の前から、施設や地域で働く介助者を対象に、虐待の当事者研究を行ってきた。当事者研究ではまず、本稿で述べた暴力のリスクに関する簡単なレク

チャーを行う。その後、参加者は自らを振り返り、虐待の可能性のあるヒヤリハット事例を報告する。大切にしているのは、犯人捜しや、自分や他人を責めることをせず、価値中立的に、起きたこと、行ったことをありのままに見つめ、参加者同士で分かち合うという点である。他人から責められかねないヒヤリハット事例を、勇気を出して研究の資源として提出してくれた参加者に、皆で拍手をする。そして、レクチャーで学んだ知識も参考にしながら、事象が起きた原因や意味を皆で考え、再び同じような事例が生じないようにするにはどうしたらよいかについて仮説を立て、実践の中で実験的に検証する。仮説の多くは、就労環境などにかかわる組織的対応が必要なものなので、自ずと管理者も研究に巻き込まれることになる。

3) 痛みについての当事者研究

介助者の当事者研究を進めていく中で、以前は介助者と良好な人間関係を築いてきた身体障害者が、高齢化に伴う二次障害によって身体的な痛みが出現したところから攻撃的になる事例が少なからず存在しているという問題が見えてきた。障害者の暴言によって、ある介助者は心身をやみ、休職や退職に追い込まれることもあれば、介助者自身が暴力的な言動によって応じてしまうこともあるという。

医学モデル的なアプローチで緩和しにくい痛みの存在は、「どうせ、自分の痛みは誰にも分ってもらえない」「痛みに対して、周囲はもっと親身にケアしてくれるべきだ」「この痛みさえなければ、自分の人生はもっと良いものになるのに」など、「破局的思考」と呼ばれる認知パターンを介して、対人的な孤立をもたらす。そして、「痛いから人間関係や社会的活動がうまくいかないのではなく、人間関係や社会的活動がうまくいかないから痛いのだ」という因果関係の逆転と、「まず痛みを取ろうとするのではなく、痛いままで社会に出たり、他者と気持ちを分かち合ったりしよう」という態度変更が回復のきっかけとなることが多い。

筆者自身、二次障害に伴う慢性の痛みに苦しめられた経験があり、8年近く、専門家や当事者の協力を得つつ、当事者研究を重ねてきた。最近、そうした知見を踏まえて、難治性の痛みをもち、対人関係にトラブルが頻発している身体障害者を対象に、痛みについての当事者研究プログラムを始めている。トラウマを併せ持っている当事者も少なくない。

今回の事件には、重度障害者や、危ない言動をしがちな人物を排除しようとする、私たちの社会の排除傾向が大きな影響を与えていることは間違いないだろう。